

# 女人と穢土浄土(中)

— 梁塵秘抄における女人の生き方をめぐって —

林 雅彦

一

平安時代の貴族たちの間で盛行した仏教行事の一つに「法華八講」がある。それは、延暦十五年(七九六)大安寺の住僧だった勤操が、隣坊の栄好の老母の菩提を弔うために、同法七人と共に行なった講会、即ち、

我等八人して八卷の経をえたり。因縁ありといふべし。七々日の忌の間は此寺に来て一日に一鉢をまうけて、一人に一卷を講ぜむ。年ごとの忌日にも、今日の八人力を合て、其日ををはりにあて、四日講を修して八卷の経を説む。名をば同法八講といひて、年ごとにかゝじ。(中略)東大寺の僧ども石淵寺の八講たふとき事などきゝて、天地院にして代々につたえおこなふ。いまにたえず。この後に寺々又皆はじめ、所々にあまねくひろまる。(下略) (『三宝絵』巻中)

を以て、我国における始まりと見做されている。因みに、「法華八講」に関しては、仏教と文学との相関々係を考察された間中富士子氏の『国文学に摂取された仏教上代・中古篇』第三章「法華八講の和歌と勸学会」に詳述がなされているので、今詳しく述べることはひかえて、それらを間中氏の著書に委ねることとしたい。間中氏が御指摘の如く、「法華八講」は、天曆九年(九五五)村上天皇が御母后藤原穩子追善のために催された御八講の頃から次第に隆盛となり、長保四年(一〇〇二)一條天皇による御母后藤原詮子(藤原道長姉)のための追善御八講、同六年(一〇〇四)藤原道長の詮子追善の八講など、盛大な講会がとりおこなわれている。又、道長の『御道関白記』藤原行成の『権記』にも屢八講の記事が記載されており、あるいは『源氏物語』の「賢木」「濡標」「鈴虫」「御法」「蜻蛉」の巻々や

『栄花物語』等の作品中にも描出されており、「法華八講」に寄せる当代宮廷人たちの関心の程が窺えよう。

『法華経』八巻を八座に分け、一日を朝夕の二座に分けて、一卷ずつ講じて四日間を終了する講会——『法華八講』——において、第三日の朝座は、『法華経』第五卷第十二品「提婆達多品」を講ずる日として、「五巻の日」又は「中日」とよばれ、とりわけ莊嚴にして華麗に催されるのであった。この日の有様の片鱗は、前述の『三宝絵』中巻所収石淵八講譚の下略部分にも、

五巻の、日薪を荷事は、国王の昔の心をまねぶ也。八講のおこり石淵寺の縁起に見たり。

薪を荷て、廻講敷の詞云

法花経を、我がえしことは、たきごこり、なつみ水くみ、つかえてぞえし。

此歌は或は光明皇后の読給へるともいひ、又行基菩薩の伝給へりとも云。いまだ不詳。(傍点引用者)

のように描かれているが、『源氏物語』「賢木」巻の描写はより詳述されている。話は藤壺中宮の催された桐壺院追善の御八講に関するもので、

中宮は院の御はての事にうち続き、御八講のいそぎを、さまざまに心づかひせさせ給ひけり。(中略)十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日日に供養せさせ給ふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙簞の飾りも、世になきさまに整へさせ給へり。さらぬ事の清らだに、世の常ならずおはしませば、まして道理なり。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極楽思ひやらる。初の日は先帝の御料、次の日は母後の御為、またの日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚り給はで、いとあまた参り給へり。今日の講師は、心ことに選らせ給へれば、薪こる程よりうちはじめ、同じういふ言の葉も、いみじう尊し。親王達も、さまざまの棒物ささげてめぐり給ふに、大将殿の御用意など、なほ似たるものなし。(傍点引用者)とある。

もう一例『源氏物語』から抜き出してみることとする。紫上の病氣平癒を祈願しての八講が「御法」巻々頭に華やかなうちにも、紫上の胸中を象徴して、しみじみと描かれている。

三月やまひの十日なれば、花盛にて、空の気色けしきなどもうららかにもの面白く、仏のおはすなる処の有様遠からず、思ひやられて、異なる深き心もなき人さへ、罪を失ひつべし。薪たきぎこる讃歎さんたんの声も、そこらつどひたる響、おどろおどろしきを、うち休みてしづまりたる程だに、あはれに思さるるを、ましてこの頃となりては、何事につけても、心細くのみ思し知る。

こうして「五巻の日」には、あたかも極楽浄土の世界かと想わしめるような、絢爛華麗な装いが凝らされ、講會に参加した人々はみな、「薪の讃歎」とか「薪こる歌」とかよばれる、「法華経をわがえしことは薪こり菜つみ水汲みつかえてぞえし」(注3)の和歌を唱和し、金銀の枝に結んだ捧物を供し、仏壇のまわりを廻る「薪の行道」なる行列を営んだのであった。この「薪の讃歎」は周知の如く、釈迦が王位を譲り、大乘の法を求めている際に仙人（実は提婆達多）に出会い、「即随仙人、供給所須、採果汲水、捨薪設食、乃至以身、而作牀座、身心無倦」という厳しい修行の末に法華経を得た「提婆達多品」前半部の話を詠んだものである。しかし、王朝貴族社会の女性たちにとっては、右の「提婆品」前半部よりは後半部の、龍女成仏（女人成仏）譚の方が格別重要だったといえよう。例えば、選子内親王の『発心和歌集』(注5)を繙いてみると、真名序に「不知出此和歌之道、彼阿字之門矣」、即ち、内親王が和歌を以て仏道に結縁しようとされた旨が記されており、又諸経に関する詠歌中には法華経二十八品歌（二十八首）が収められていて、「提婆達多品」の歌は、

皆遙見彼童女成仏、普為時會人天說法 心大觀喜(ママ)

36さはりにもさはらぬためしありければへたつるくも、あらしとそおもふ（傍点引用者）  
とある。『発心和歌集』とほとんど同時代の『赤染衛門集（榊原家本）』『大納言公任集』の二集においても、同様に完全な形態の法華経二十八品二十八首の和歌を有し、問題の「提婆品」の詠歌はいずれも、

276わたつみのいろをいてたるほともなくさはりのほかになりにける哉

（『赤染衛門集』）

270みな人を仏の道にいれつれば仏のあたも仏なりけり

（『大納言公任集』）

271さはりおほみなみを分こし身をかへて蓮の上に入とこそみれ

（同右）

と、龍女成仏譚をテーマにして認められているのである。そればかりか、藤原道長や西行もそれぞれ、

法華經二十八品の歌、人々によませ侍けるに、提婆品の心を

法性寺入道前関白太政大臣

1928 わたつうみのそこよりきつるほともなくこの身ながらに身をぞきはむる

提婆品

(『新古今和歌集』卷二十・釈教歌)

883 いさきよきたまを心のみかき出ていはけなき身にさとりをそえし

提婆品

(『山家集』中)

我献宝珠 世尊納受

(『聞書集』)

13 いまそしるたふさのたまをえしことは心をかかたとへなりけり  
と詠歌したのであった。菅原孝標女はその著『更級日記』の中で、父の任国から都に戻り、おばから贈られた『源氏物語』を「一の巻よりして、人もまじらず、木ちやうの内にうち臥してひき出でつゝ見る心地、後のくらひも何にかはせむ」と、昼夜の区別なく読み耽っていたところ、ある夜夢中に「いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華經五卷をとくならへ」と言われたが、夢のことは誰にも語らず、『法華經』卷五を誦誦しようとも思わなかつたと書いているが、ここにも「提婆達多品」の龍女成仏譚の影響を認めねばなるまい。間中富士子氏の説かれる如く、孝標女に、『源氏物語』に読み耽りながら『法華經』も読まぬことに対する自責の潜在意識があつたからこそ夢見たのであり、「われはこのごろわろきぞかし」と自嘲的に書かずにはおられなかつたのであろう。こうした背後に、例えば、

家のまへを、法師の女郎花を持ってとをりけるを、いつくへゆくそとはせければひえの山の念仏の立花になんもてまかるといひければ、むすひつけゝる

256 名にしおほは五のきはりあるものをうらやましくものほる花哉

(『和泉式部集』、静嘉堂文庫蔵)

はりまのひしりにやる

257 くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月

ふたつなくみつなき法とききつれば五つの障りあらじとぞ思ふ

(同 右)

(『九冊本』『宝仏集』卷九)

などの和歌に見られるような、生まれながらの業障深重の者と極め付けられた女人たちの、仏法に寄せる飽くことなき心情を感じずにはおられないのである。

## 二

平安末期の歌謡集として貴重な後白河院御撰『梁塵秘抄』は、巻一(抄出)及び巻二のあわせて五百数十首の歌謡を収めた歌詞集と、巻一(抄出)・巻十の口伝集とが僅かに現存するに過ぎない。しかしながら、それらには、伝統的な和歌の世界にとって代わり、遊女・白拍子・傀儡女・巫女、あるいは芸能伝播を生業とする聖や山伏・農民・樵夫・漁夫・獵師、ひいては博打打ちなどの庶民的な世界が語られ、その歌謡の大部分が数多の人々によって伝承されていることを考慮するならば、享受者の興趣を掻き立てるに余りあるといえよう。換言すれば、これこそ歌謡集たる『梁塵秘抄』の心髄と考えてさしつかえないと思われる。事実、新間進一氏「古典と近代——現代詩歌の源流としての梁塵秘抄——」(解釈と鑑賞、昭21・11)や大岡信氏「うたげと孤心(四) 帝王と遊君」(すばる、第十五号)によれば、『梁塵秘抄』の歌謡が大正年代の北原白秋・斎藤茂吉・佐藤春夫・芥川龍之介らの詩に直接的な影響を及ぼしており、森鷗外『曾我物語』(大正3・3)・坪内逍遙『名残の星月夜』(大正6・12)の劇作二篇も同様に『梁塵秘抄』歌謡を伴って語わしめているという。そして、右記の大岡信氏も又、多分にこれらの歌謡に魅せられた現代詩人のひとりのように見受けられる。

王朝貴族社会の仏教行事において、法華八講の「五巻の日」がどれほど重要視せられたものであったかは、既に前節で眺めた通りである。このような傾向は、院政期成立のこの『梁塵秘抄』にあっても顕著に認められる。即ち、巻二・法文歌二百二十首の過半を占める「法華經二十八品歌」は百十五首(実数では百十四首)収載されているが、その中で最も多く語われているのが「提婆達多品」十首であって、しかも所謂「薪の讃歌」と趣向を一にする歌謡は、

112 氷を叩きて水掬ひ、霜を払ひて薪採り、千歳の春秋を過ぐしてぞ、一乗妙法聞き初めし

をはじめ、六首に及んでいる。<sup>(注10)</sup>同じく四句神歌・徑歌にも、

291 妙法習ふとて、肩に袈裟掛け年経にき、峯に上りて木も樵りき、谷の水汲み、沢なる菜も摘みき

と、現実生活そのものの匂いを感じしめる一首があり、先の六首と併せると、平安後期の人々も決して少なからぬ関心を示していた、と言えるであろう。又、『建礼門院右京大夫集』にも、『梁塵秘抄口伝集』（以下『口伝集』と略称）成立から程遠からぬ安元三年（一一七六）七月七日の、御母后建春門院滋子の追善のために、高倉天皇「御てづから御経かゝせおはしまして、内裏にて御八講おこなはれし五卷の日」の模様が回想風に述べられ、「九重にみのりの花のほふけふやきえにし露もひかりそふらむ」と、この日抱いた作者右京大夫の感慨が詠ぜられている。

ところで、阿弥陀仏の誓願・慈悲を謡った法文歌・仏歌に、

29 阿弥陀仏の誓願ぞ、返す返すも頼もしき、一度御名を称ふれば、仏に成るとぞ説いたまふ

30 弥陀の誓ひぞ頼もしき、十悪五逆の人なれど、一度御名を称ふれば、来迎引接疑はず  
とある。前者が、一念成仏という阿弥陀仏の四十八願中の念仏往生願の「頼もしき」を説いているのに対して、後者は、たとえ十悪五逆の罪を犯した者であっても、一度悔い改め、弥陀の名号を称えれば、必ず来迎引接は疑いなしとする「頼もしき」を謡いあげている点で、極めて特異な存在だといえるだろう。ここに明示された思想が、（およそ既成仏教家の立場からすれば、仏道の対極に位置するはずの）殺生を術のたつきとなす者たちや遊女・白拍子の類にとって、極めて歓迎すべき済度と映じたであろうことは、想像に難くない。殺生戒及び邪淫戒は共に「五戒」「八戒」「十戒」のそれぞれに入っている。『梁塵秘抄』においても、

240 佛き此の世を過ぐすとて、海山稼ぐとせし程に、萬の仏に疎まれて、後生我が身を如何にせん（雑法文歌）

355 鵜飼は可憐しや、萬劫年経る龜殺し、又鵜の頸を結び、現世は斯くてもありぬべし、後生我が身を如何にせん（四句神歌・雑）

440 鵜飼は悔しがる、何しに急いで漁りけむ、萬劫年経る龜殺しけむ、現世は斯くてもありぬべし、後世我が身を如何にせん（同右）

のように、日常生活の殺生そのものがただちに悪行の積み重ねである、と認識するに至った人々の罪業観を表現しているのである。又、鵜飼いの様子を謡った、

475 淀河の底の深きに鮎の子の、鵜といふ鳥に背中食はれてきりくめく、可憐しや（二句神歌）

も、鵜の嘴の先で必死に最期のあがきをしている鮎の姿を、簡潔にしてリアルにとらえ、憐憫の情を寄せているが、それと同時に、殺生に対する潜在的な罪業意識の一端をも覗かせているように思われてならない。言い換えれば、右に掲げた幾つかの歌謡は、余儀無く卑賤な身分に甘んじ、常に墮地獄の戦慄にとりつかれた底辺の人々の嘆声として、我々読者の心中に傷く哀しく響いてくるのである。そうしてみると、前述30の「弥陀の誓ひぞ頼もしき、十悪五逆の人なれど、一度御名を称ふれば、来迎引接疑はず」の存在が相当大きな意味を持っているようである。

院政期になると、比叡山及び高野山などの既成教団においては、その世俗化がいよいよ急速になされていった。そういう傾向を憂慮し、批判し、そして厭うた心ある人々は、やがて己れの属する各教団を離脱して、山中や巷間において、隠遁・遊行・別所といった、形態を異にするそれぞれの宗教生活へと入って行った。「聖」とか「上人」「沙弥」と呼ばれる仏教家たちがそれである。<sup>(注12)</sup> 彼らの中には、巷の人々の間でさまざまな教化教説の布教活動を行なった聖法師がいた。巷にあって巷に生きる男女に仏の救いを伝えることに生活の糧だけを求めたり、巷の人々に仏の救いを取りつぐことに宗教的使命を見出したりしていたのである。<sup>(注13)</sup> しかし、笠原一男博士が例をひいて説かれるように、「仏の救いの論理」などを体得していない聖法師や尼も決して少なくなかったようである。<sup>(注14)</sup>

『宇治拾遺物語』を一瞥した限りでも、幾つかの興味深い説話を発見することが出来る。例えば、鑄物師の妻との密通の現場を夫に、偶見付けられ、歟で打ち破られた額の傷をこれ幸いと「是は随求陀羅尼をこめたるぞ」と吹聴して憚らず、事の真相が露見してもなお且つ「そのついでにこめたるぞ」と減らず口をたたいっている山伏を扱った「随求陀羅尼籠額法師事」(第五話)、これに続く、「煩惱をきりすてて、ひとへにこのたび生死のさかひを出でなと思とりたる聖人」と自称する法師が、化けの皮をはがれて、実は「人をはかりて物を乞はんとした」狂惑の法師であったという「中納言師時の玉くき検知の事」(第六話)のような「人を食った」性と哄笑の説話が書かれている。又、浄土教思想の浸透していく中で盛んだった異相往生の一つ、入水往生をめぐる若い聖の苦悩と執心を描いた悲喜劇「空入水したる僧の事」(第百三十三話)がある。主人公の三十余歳の聖は、入水の意志など毛頭なかったために、桂川の川原に臨みながら、なお往生の刻限を延ばそうと目論んだり、往生の瞬間、

この聖、たふさぎにて、西にむかひて、川にざぶりと入程に、舟ばたなる繩に足をかけて、つぶりとも入らで、

ひしめく程に、弟子の聖はづしたれば、さかさまに入りて、ごぶくとするを、男の、川へおりくだりて、「よくみん」とて立てるが、この聖の手をとりて、引あげたれば、左右の手して顔はらひて、くくみたる水をはきすてて、この引上たる男にむかひて、手を摺りて、「広大の御恩蒙さぶらひぬ。この御恩は極楽にて申さぶらはん」と云て、陸へ走りのぼるを、……（下略）

と、情ない失態を演じてしまう。にも関わらず、後に人のもとに送った手紙の上書には、「前の入水の上人」と記したという後日譚のおまけまで付いている。同じく桂川での入水往生譚を収めた『発心集』巻三(3)「蓮華城入水事」は、美事に入水を成し遂げた聖蓮華城に寄せる人々の讃歎・思わくを描くとともに、そのかたわらで知られざる入水時の蓮華城の後悔の念を彼の物怪に語らしめていて、甚だ興趣をそそられる。栄誉や声望のためにのみ、まるで競い合うかの如き入水往生の風潮は、上述の如き似非聖をも屢登場させたに相違ない。こうした事態を『宇治拾遺物語』の編者がそつと見守り、時に容認しているのに対し、『発心集』の編者鴨長明は、ある聖の言を借り、「彼水ニヲボレテ、既ニ死ナント仕シヲ人ニ助ラレテ、カラウジテイキタル事侍リキ。ソノ時ハナクヨリ水入テ責シ程ノクルシミハ、タトイ地獄ノ苦ナリトモ、サバカリコソハト覚ヘ侍リシカ。然ヲ人ノ水ヲ安事ト思ヘルハ、未ダ水ノ人殺ス様ヲシラヌ也」（傍点引用者）と、警鐘を鳴らし、決して入水が易行でないことを主張している。

これも又周知の『古今著聞集』巻十六「興言利口第廿五」に、一生不犯の尼の破戒の顛末記を極めて生ま生ましく描き出した「或僧一生不犯の尼に恋着し偽りて其の尼に仕へて思を遂ぐる事」(59話)・「南都の一生不犯の尼臨終に念仏を唱へざる事」(59話)の連続する二話が存在する。一切の妄執を捨ててひとえに仏道に勤しんで来た不犯の彼女らが、終極の場に至って、「是程によき事を、いかゞはわればかりにてはあるべき。上分仏にまいらせん」(59話)とか、「一期があひだ、ゆくしくおもひとりては侍れども、心のうちには此事をかけ」(59話)と、他ならぬ「男女の交わり」の前に嚙々として精神の崩壊を来していく意外性を見ていると、あらためて仏道修行の「近くて遠き」ことを思わずにはいられないのである。

しかし、一方では、自分たちに負わされた罪障と真剣に取り組んだ、無名の聖法師たちの存在していたことも忘れはならない。『今昔物語集』巻十五第二十七「北山餌取法師往生語」以下、「鎮西餌取法師往生語」「加賀国僧尋寂

往生語」美濃國僧業延往生語」の連纂四話の主人公たちは、妻帯肉食の生活を営む餌取法師、もしくはそれを想わしめる法師たちであつて、各々逃れ難い己れの罪障の深さに苦しみながらも、その罪障を心底から凝視した、ひたむきな願極樂往生の実踐者だったのである。『今昔物語集』の編者は、第二十七話及び第二十八話の末尾で、それぞれ「此ヲ聞ク人、『食ニ依テハ往生ノ妨ト不成ズ、只念仏ニ依テ極樂ニハ參ル也ケリ』ト皆知リケリ」、「若此ノ事ヲ聞ク人、皆、此ノ所ニ來テ結縁シテゾ返シ」と記しているが、例の『梁塵秘抄』30の歌謡とともに、浄土教思想の新たな動きを関知したものだといえよう。

以下、『梁塵秘抄』の歌謡を通して、剥き出しになつたままの女性たちの生き方を探つてみようと思つたのである。

### 三

五障三従の我が身を厭い、発心・往生を願う女人たちの声が、この『梁塵秘抄』の歌謡の上にも大きく影を落とすしていることは、既に諸家の説くところである。次に列記する幾つかの歌謡は、龍女の変成男子譚に事寄せて、

113 沙羯羅王の女だに、生まれて八歳といひし時、一乗妙法聞き初めて、仏の道には近づきし（法文歌・法華經廿八品・提婆品）

116 女人五つの障りあり、無垢の浄土は疎けれど、蓮花し濁りに開くれば、龍女も仏に成りにけり（同右）  
117 凡す女人一度も、この品誦する声聞けば、蓮に上る中夜まで、女人永く離れなむ（同右）

208 龍女は仏に成りにけり、などか我等も成らざらん、五障の雲こそ厚くとも、如来月輪隠されじ（雜法文歌）

と、あの畜生、それも女人であり、僅か八歳という年端もいかなない龍女でさえ、法華經を聞いて成仏が叶つただけなら、たとえ生まれながらの障りあるわれわれ女人たちでも紛うことなく成仏出来るはずだと、女人成仏・往生を謡っている。そして又、

119 常の心の蓮には、三身仏性おはします。垢つき穢き身なれども、仏に成るとぞ説いたまふ（法文歌・法華經廿八品・提婆品）

の歌謡も、諸の煩惱のなせる垢穢の身——業障深重の身から解放され、成仏せんことを願つてやまぬ女人たちの心情

を慮おもんばつて謡うたつたものである。その他、153・292・293等でも龍女成仏（即ち女人成仏）を題材として扱あつかっている。（注18）

ところで、四句神歌・雑の中に甚だ興味をひかれる、

394 女の盛りなるは、十四五六歳廿三四とか、三十四五にし成りぬれば、紅葉の下葉（注18）に異ならず

409 鏡曇りては、我が身こそ寝れける、我が身寝れては、男退おとどけ引く

という二首がある。394の歌謡は、勿論今日の我々の生活形態とは大いに異なっているものの、結婚適令期という「女の年頃」をそれとなくとらえていて面白いし、409の方は、荒井源司氏『梁塵秘抄評釋』では、「鏡の手入も届かぬがちな年頃になれば、自分の身も寝れて来る。身が寝れ衰へて来れば、男は次第に遠のいて行くのだ」と解されているが、それを援用すれば、「女の命」とか「女の魂」といわれる鏡の次第に曇って行くのと期を同じゅうして、「紅葉の下葉に異ならぬ年頃となった女性の歎声のように感ぜられる。

「女の盛り」といえば、当然の事として恋や結婚の問題がつきものである。『梁塵秘抄』の歌謡の世界も又その例外ではない。そこで、次に人生の機微を穿つた幾首かを抜き出してみることにする。

340 冠者は妻設めづけに来きんけるは、構かまへて二夜は寝ねにけるは、三夜といふ夜の夜中よなかばかりの晝ひるに、袴取りて逃げにける

は（四句神歌・雑）

341 吾主わぬしは情無なさけなや、妾わらわが在あらじとも棲すまじと（も）言いはばこそ憎にくからめ、父ちちや母ははの離さけたまふ仲ななれば、切きるとも刻きざ

むとも世よにもあらじ（同右）

342 美女みよめ打ち見れば、一本葛ひととまがづらにもなりなばやとぞ思おもふ、本もとより末すえまで纏よらればや、切きるとも刻きざむとも、離はなれ難がたきはわ

が宿世しゆくせい（同右）

459 我が恋こひは一昨日おとといひ見えみえず昨日きのふ来きず、今日けふ音信おとづれ無なくば明日あすの徒然いたか如何いかにせん（二句神歌）

460 恋こひひ恋こひひて邂逅なつかに逢あひて寝ねたる夜の夢ゆめは如何いか見る、さし／＼きしと抱だくとこそ見みれ（同右）

464 東屋とうやのつまとも終はつに成ならざりけるもの故ゆゑに、何なにとてむねを合あはせ初はじめけむ（同右）

468 山伏さんぶつの腰こしに着きけたる法螺貝ほらがひの、丁ていと落おち、ていと割われ、碎くだけて物を思おもふ頃ときかな（同右）

485 恋こひしとよ君恋きみこひしとよゆかしとよ、逢あはばや見みばや見みばや見みえばや（同右）

これらを大略整理すると、340は男の側から、残り六首は女の側に立って謡っていると考えられる。即ち、340では生半可な気持ちしか持たぬ若い男の慌てた姿を滑稽に描き、342では340と正反対の世界とでも言うべき、心底から異性を恋した男の心持を謡っている。又、468・485は、恋慕の切なさ哀しさを狂おしいまでに謡い、460は激情としか言いようのない「遊垢」の欲情をストレートのまま謡っている。しかるに、両親の許さぬ愛の世界を謡った341は、追いつめられた状況の時には、男よりも積極的に動く女の心を鋭敏にとらえ、459は間遠になった男への苛立ちと、それを裏返しにしたいまだに尽きせぬ慕情との混在する複雑な心理を表現している。そして、464では、激しい恋の挙句に辿り着いた醒めきった気持、つまり、相手と結ばれ得なかった恋への悔恨を、深い哀しみを込めて謡うのである。

結婚したからといって、女性が誰しも幸福になれるとは限らないことは、あらためて言うまでもない。こうした例の一つに、「後妻打ち」を素材とした、

378 池の澄めばこそ、空なる月影も宿るらめ、沖よりこなみの立ち来て打てばこそ、岸も後妻打たんとて崩るらめ  
(四句神歌・雑)

がある。『梁塵秘抄』と同じ頃の藤原頼長の日記『台記』の康治二年(一一四三)十一月十七日條にも、「後妻打ち」の記事が見える。宮城栄昌・大井ミノブ氏編著『新稿日本女性史』「一律令的地位が低くなった女性」に拠れば、妻のうち本妻あるいは前妻を「こなみ」といい、次妻以下あるいは後妻を「うわなり」といった。嫁入婚が一般化すると、「こなみ」と「うわなり」が同居することになり、妻同志の感情生活はいっそう深刻なものになった。

うわなり打ちはどこにもみられる現象であり、人の愛欲の世界たる意味はそこにあった。(5 恋愛と結婚)  
と述べ、『大和物語』『権記』『御堂関白記』『宝物集』等に「後妻打ち」の例のみられることを指摘されている。(注19)

ついでにもう一首、

377 尼は斯くこそ候へど、大安寺の一萬法師も伯父ぞかし、甥もあり、東大寺にも修学して子も持たり、雨氣の候へば、物も着で参りけり(四句神歌・雑)

に関して触れておきたい。見るからに粗末ないでたちは雨のためだと懸命に弁明する尼の言種は、妄執からのがれ、

仏に仕える者には決してあるまじき物言いであると同時に、眺められたり噂されたりしたくないと念ずる人間の弱さをもろぞかせていて、考えさせられる。事実、『蜻蛉日記』の作者は、安和元年（九六八）初瀬（長谷）の観音に詣でた際に乞児たちの哀れで穢らわしい有様を見ると、潔斎してきたにもかかわらず、「げすぢなる心地して、しりおとしてぞおぼゆる」と、下衆の身になったような気がした旨を記している。又、『今昔物語集』巻十六第二十八「参長谷寺男依観音助得富語」及び第二十九「仕長谷観音貧男得金死人語」の連続二話も、同様に下衆や乞食で混雑している長谷の様子を描いている。上臈は言うに及ばず、僧侶たちの間でさえもこうした下賤な人々の参詣を疎ましく思っていたことは、『今昔』巻十六第二十八話を見ても十分察せられるところである。話を掻い摘まんで言う、主人公の男が観音の前で長時間伏して祈願していると、そこへ寺僧たちがやって来て、「此ハ何ナル者ノ、此テ候フゾ。見レバ、物食フ所有トモ不見ズ。若、絶入ナバ、寺ニ穢出来ナムトス」と語ったというのである。さらに、『発心集』巻六(7)「乞者尼得単衣二奉二加寺二事」は、

或ナマ宮仕人ノ清水ニ籠リタリケル局ノ前ニ、色シラバミサレホレタル老尼ノカゲノ如クヤセ衰ヘタル物ヲ乞アリク有ケリ。十月ハカリニキタナゲナル破帷一ツ著テウヘニ簀ヲ著タリケリ。見ル人「アナイミジノサマヤ。雨モフヲヌニ、ナド簀ヲ著タルゾ」ト問フ。「是ヨリ外ニ持タル物ナケレバ、寒サハサムシ、スヂナクテ」ナド答フルヲ、「アタゝマリアルベルシトコソ覚ヘネ」ナド云テワラヒケリ。クタ物ナド喰セタレバ打クキテ立ケルヲ、イカゝ思ヒケン、呼カヘシテ単ヲナン一ツ推出シタリ。悦ヒテ取テイヌト思ホドニ、ヨナジキ寺ニ奉加スムル所ニユキテ、硯コヒテ、イトウツクシキ手ニテ此歌ヲカキ付ツゝ、単ヲ置テイツチトモナク隠レニケリ。カノ岸ニコギ離タルアマナレバヲシテツクベキ浦モゝタラズ

と、清水寺を舞台に、破帷をただ一枚纏って物乞いする卑賤な尼のひたぶるの道心を物語る。しかし、本話でも、上臈の眼にはこの尼が単なる賤しい、笑いの対象者としてのみ映じているに過ぎないのである。してみると、やはり寺院にでも参詣した時などを想定し得る『梁塵秘抄』377の老尼の心中も、場合によっては、それはそれとして容認されるべき性質のものなかもしれない。

自らも日夜今様習得に励まれた後白河院は、『口伝集』卷十結末部分で、次のように披瀝されている。

大方、詩を作り和歌を詠み手を書く輩は、書き留めつれば、末の世までも朽つる事無し。声技の悲しきことは、我が身崩れぬる後、留まる事の無きなり。其の故に、亡からむ後に人見よとて、未だ世に無き今様の口伝を作り置くところなり。(傍点引用者)

漢詩・和歌・書などの芸術とは異なり、今のままでは後継者もなく、やがて滅び行くであろうことは必定な運命にある膨大な「声技」——今様を何とか書き留め、後世に遺し伝えようと努めてやまなかつた後白河院の御姿が、右の文の行間から彷彿として生じて来るような気がする。これ程までに後白河院を魅了した当時の今様の流行の実態は、上達部・殿上人は言はず、京の男女・所々の端者・雑仕・江口神崎の遊女・国々の傀儡子、上手は言はず、今様を謡ふ者の聞き及び我が付けて謡はぬ者は少なくやあらむ。(『口伝集』卷十)

の如きものであった。そして、今様の重要な伝達者としての役割を負った遊女や傀儡女、白拍子たちは、すっかり今様の虜となった後白河院の御所に時に召されては、その得意の歌謡を謡って聞かせたという。いち・めほそ・九郎・藏人禪師・千手・二郎・さゝなみ・初声・さはのあまこころ等々名立たる女性たちが次々と院の前に登場したのである。

院にとつて「年来いかで聞かむと思し」人であり、又、後日生涯の今様の師となった遊女乙前との出会いは、保元の乱も治まった同二年(一一五七)正月十余日だった。屢引用する『口伝集』卷十を見ると、この時の模様を、「人を退けて、高松殿の東向の常に在る所にて、歌の談議ありて、我も謡ひて聴かせ、あれがをも聴きて、曉明くるまでありて、その夜契りて、(下略)」と、その日のうちに師弟の約束を取り交わすまでに至った旨記している。この乙前は、宮姫(みやぎ)——小三——なびき——四三——目井——乙前——後白河院という、美濃国青墓の傀儡女の歌謡相承の系統に位置する女性であった。

因みに、『口伝集』卷十に「青墓の者」とか「青墓の君ども」と呼ばれる女性たちに関わる記事が見られる他、『詞

花和歌集』卷六「別」には青墓の「くぐつなびき」の詠歌一首が収載されており、『平治物語』以下『屋代本平家物語』「劍の巻」・「十訓抄」第十・幸若舞曲『烏帽子折』・説経節『小栗判官』などの文学作品は勿論、『尊卑分脈』清和源氏・朝長の項にも、我が身を販いで生きる青墓の女たちが種々雑多に描かれている。(注21)これらは、青墓の地が古くから知られた傀儡女たちの屯集地であり、歌謡の伝承及び管理に適しい土地だったことを物語っているのである。

遊女乙前が後白河院に召された時、既に彼女は七十歳を越えていた。以後、乙前の亡くなるまでの十余年は、二人にとつて遊女と院という身分を忘却し、師匠から愛弟子への秘曲伝授という、文字通り今様一筋の歲月であった。そして、よく知られている如く、今様を媒とする両者の感動的な心のふれあいは、まるでとどまるところを知らぬかのように、乙前の没後まで連綿と続いて行ったのである。

## 五

古くから遊女たちは、淀川や瀬戸内海の大きな港に集まり、行き交う舟の旅人や遊客の一夜を慰めるべく、推参術(注22)に明け暮れしていた。その間の事情は、大江匡房の『遊女記』が、

摂津国、有江口、神崎、蟹島等地。比門連戸。人家無絶。倡女成群。棹ニ福舟、看ニ旅舶、以薦ニ枕席。声過ニ溪雲。韻飄ニ水風。經廻之人。莫レ不レ忘レ家。洲蘆浪花。釣翁商客。舳艫相連、殆如ニ無水。蓋天下第一之樂地也。  
(中略) 上自ニ卿相ニ下及ニ黎庶。莫レ不レ接ニ牀ニ施ニ慈愛。又為ニ人妻妾ニ歿ニ身被レ寵。雖ニ賢人君子ニ不レ免ニ此行。

と述べているのははじめ、藤原明衡の二著『新猿楽記』『明衡往来』卷中末、『長秋記』元永二年九月三日条、『扶桑略記』第廿八「後一條天皇」治安三年十月廿九日条、『栄花物語』「松のしづえ」等々、仔細に記述している。(注23)後白河院の『口伝集』卷十・末尾の一節でも、

遊女の類。舟に乗りて波の上に浮かび、流れに棹をさし、着物を飾り、色を好みて、人の愛念を好み、歌を謡ひても、よく聞かれんと思ふにより、外に他念無くて、罪に沈みて、菩提の岸に到らむ事を知らず。

と、その頃の遊女の大半が、およそ仏教とは関係のない、というよりは、明らかに仏戒を犯すような行為を生業なりわいとしていた、と指摘する。海・湖・河川に魚貝を求め、山野に鳥獸を追ひ、それを生活の術わざとしなければならなかった破

戒者については、既に第二節で述べた通りである。いったい既成教団から蔑まれた下賤な女性たちは、厭離穢土・欣求浄土をどのように受けとめていったのであろうか。

次に、遊女に関わる歌謡を四句神歌及び二句神歌から取り出し、若干の検討を試みたい。

334 常に恋するは、空には織女流星、野辺には山鳥秋は鹿、流れの君逢冬は鴛鴦（四句神歌・雑）

ここに詠まれた織女・流星・山鳥・鹿・鴛鴦は、いずれも古来「恋を身上とするもの」と見做され、屢文学作品に登場してきたものばかりである。「流れの君」と呼ばれる遊女も又「恋を身上」とするものにかわりはない。しかし、「恋を身上」とは言うものの、己れを海辺の藻に、男性を風に見立てて謡った、

457 波も聞け小磯も語れ松も見よ、我を我といふ方の風吹いたらば、何れの浦へも靡きなむ（二句神歌）

を眺めていると、それは一夜限りの儂い、そして孤独な恋に甘んずるものであったことが知られる。これこそ、遊女の生業そのものを象徴している。思えば、『和漢朗詠集』卷下「遊女」・722ならびに『新古今和歌集』卷十八・雑歌下・1701に収められた、

白浪のよするなぎさによをすぐす海人の子なればやどもさだめず  
（『和漢朗詠集』）

も、定まった宿もなく、これときまった男とてなく、毎日ただ空しく春を販いで生きている遊女の境涯を、甚だ自嘲的に詠んでいて、やはり哀しい。次に掲げる、

388 西の京行けば、雀齒黒め布殺鳥や、さこそ聞け、色好みの多かる世なれば、人は響むとも、塵だに響まずは（四句神歌・雑）

は、彼女たちの心や感情などどうでもよく、販ぐ春のみを求める「色好み」の決して少なくなかったことを想像せしめる。荒井源司氏『梁塵秘抄評釋』は、「何れにしても痛い腹をさぐりあてられた狼狽ぶりの見える、落着かない調べを持った歌謡である」と評している。行きつくところ、「自分さえ騒がねば問題などありようはずがない」と、疑念を抱く妻（恋人）を懸命に賺す夫（男）の気持ちを書いたものであろう。

哀れな運命を負った遊女に対する極端な見方を謡ったのが、

473 東より昨日来れば妻も持たず、此の着たる紺の狩襖に女換へ給へ（二句神歌）

である。あるいは、東国の田舎者の野放図な物言いとして、人々の嘲笑をかったかもしれない。尤も視点を交えれば、飾り気の無い、逞しく生きる庶民の世界の投影だとも考えられる。大岡信氏の言を借りれば、「はじめて憧れの京へやってきた東国の男が、まずはみやこに名高い遊君を抱かねばと、胸高鳴らせて足を運んだのだ。田舎者のおどどした、それでいて押しつつよい求愛は、都会の遊女にとっては、またひとつのみにちがいがなかったらう。彼らが一個所にとどまっている時でも、男たちはさまざまな土地からやってきて、彼女らを通過していった。ここにも別の道行があつた。」(傍点引用者)という。

(注24) 男に身を委ねる遊女として「おんな」である。それゆえ、一夜の慰み者から洛中貴紳の妻妾にまで成り上がった者もいた。だからといって、世の中は万事上手いくとも限らない。

338 葦粧狩場の小屋並び、暫しは立てたれ聞の外に、懲らしめよ、宵の程、昨夜も昨夜も夜離れしき、悔過はしたりともく、目を見せむ(四句神歌・雑)

339 我を頼めて来ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ、さて人に疎まれよ、霜雪霰降る水田の鳥となれ、さて足冷かれ、池の萍となりねかし、と揺りかう揺り揺られ歩け(同左)

右の連続する二首は共に遊女の「おんなごろ」を謡う。前者は、言うまでもなく、遊女のもとに足繁く通つた武士が、最近夜離れてしまったことを憤る歌謡である。「今度あの男が来たならば、聞の外に立たせておいて懲らしめてやる」と言いながら、即座に「宵の程」と限定してしまう。そう言っておいて、再び「悪かったと詫びたとしても、懲らしめてやる」と言う。そこに、夜離れへの無念さと、なおかつ相手の男を心のどこかで求め続けているという、交錯した女の心理を読み取ることも可能である。後者は、男の愛の囁きを偽りなき言葉と信じきつた遊女の、不誠実な男への呪いをテーマとする。所詮は遊び以外の何物でもなかった男と、穢れ多き身とはいえ、相手の男へ真摯な思いを寄せた遊女とを、実に美事なタッチで描き出している。志田延義博士は、この歌謡を男の姿が「恐ろしい異形の鬼からあわれな鳥、鳥からまたはかない浮き草と、移って行くのは、知らず識らずのうちに落ちてゆく、憤りから嘆きへ、いつのまにか自然と頭も垂れて自らをあわれまなければならなくなつたためいきをつくやるせなさを示しているように思う。」と評されたが、正しく、男に裏切られた遊女の怒りと歎き、ひいてはその哀しい宿命を痛

切に謡った秀れた一首だといえよう。

ところで、巫女に関する歌謡も、四句神歌に多数見えている。いま彼女たちの日常生活の一コマを綴ったものを列記すると、

265 金の御嶽にある巫女の、打つ鼓、打ち上げ打ち下ろし面白や、我等も参らばや、ていとんとうとも響き鳴れく、  
打つ鼓、如何に打てばか此の音の絶えせざるらむ (四句神歌・神分)

324 鈴は亮振る藤太巫女、目より下にぞ鈴は振る、ゆらくと振り上げて、目より下にて鈴振れば、懈怠なりとて、  
忌々し、神腹立ちたまふ (四句神歌・雑)

330 よくくめでたく舞ふものは、巫小槽葉車の筒とかや、八千独染蟾舞手傀儡、花の園には蝶小鳥 (同右)

331 をかしく舞ふものは、巫小槽葉車の筒とかや、平等院なる水車、囃せば舞ひ出づる螳螂、蝸牛 (同右)

273 住吉四所の、お前には、顔よき女体ぞおはします、男は誰れぞと尋ねれば、松が崎なる好色漢 (四句神歌・神分)

362 王子のお前の笹草は、駒は食めども猶繁し、主は来ねども夜殿には、床の間ぞ無き若ければ (四句神歌・雑)

前者の「顔よき女体」とは美しい巫女を比喻した語句であって、何やら艶めかしさが感ぜられる。海上安全の守護神・歌の神様として古来著名な摂津国の住吉神社の巫女が、春を買いでいたのである。後者は、若い巫女の裏の生活、つまり多数の男性にわが身を委せる夜の生活を心憎いほど具体的かつ妖艶に謡っている。事の好悪に関わらず、

このような現実が存在したことは確かなことである。そして、同じことが歩き巫女についても言えるのである。  
364 我が子は十余に成りぬらん、巫してこそ歩くなれ、田子の浦に汐踏むと、如何に海人集ふらん、正しとて、問  
ひみ問はずみ騁るらん、いとほしや (四句神歌・雑)

これは、志田博士の説かれるように、「巫女たる母親が、県歩き(地方回り)するわが娘の歩き巫女を思う歌」であるが、かつて騁者の忌わしい体験を有する母巫女の、稚いわが娘巫女にはそうあって欲しくないと念ずる、敬虔な祈りにも近い心情の吐露なのである。

以上、本節でとりあげた遊女・巫女に関する歌謡をあらためて整理してみると、これらの歌謡の中には、邪淫戒を

破っているのだという罪業意識があまりはつきりは認められない。しかしながら、それらの底流に如何とも表現したい哀感が漂っているように感ぜられるのは、ひとり筆者だけであろうか。推参銜売に明け暮れる日々を過ごし、やがて老いを迎えた時、彼女たちはいったいどのような人生を再び歩もうというのであろう。(注29)

四句神歌・雑の中に、

380 遊女の好むもの、雑芸鼓小端舟、笠駢、鱸取女、男の愛祈る百大夫

がある。ここでは遊女の生業に必要なものを謡っている。脂粉を塗りたくり、鼓を携えた若い遊女を乗せて、河の流れを往来する小端舟の櫓を操る鱸取女は、他ならぬ遊女の成れの果てであった。又、若い遊女の後ろから笠をさしかけるのも、老いた遊女の哀れな末路の姿であった。老いた遊女の姿は、大江以言「見遊女二に、「少者脂粉歌咲。以蕩人心。老者担笠擁棹。以為己任。」〔『本朝文粹』巻九、傍点引用者〕と記されている。あるいは、後世の『法然上人行状絵図』（知恩院蔵・『四十八巻伝』とも称す）巻三十四の「室の遊女」を描いた画面にも、鱸取女の姿が伺われる。

銜売一筋の人生の中にも、ふとしたことがきっかけとなり、己が罪業の深きを悔いることもあったであろう。そのような心境を謡ったのが、

359 遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の声聞けば、我が身さへこそ動がるれ(四句神歌・雑)

の一首である。横井清氏は、「この一首に溢れるものは、子どもの遊びやわらべうたの純粹さの内に、もはや求めて得られぬ清らかさを想い、かつ、このような己れですらも永遠に救済したまう仏を渴仰しつづける遊び女たちのさびびであった。」と説かれる。(注30) 一見、明るい童謡的な調べの裏に、哀切な遊女たちの宿世が色濃く秘められていることを、我々は忘れることはならない。

年老いた遊女が、来し方をふりかえった時、今まで幾度となく仏戒を犯し破って来た己れの哀しい運命を、いやでもじつと見詰めねばならなかったであろう。そればかりか、よくよく考えてみれば、わが身を委せた多くの男たちをも、偏に破戒行為へと誘って来たのかもしれない。たとえ、その行為が生きんがための罪の繰り返しではあったとしても、彼女らは心底から悩み苦しんだことだろう。そして、その苦悩の中から、仏に救いを求めたであろうことも想

像に難くない。(注31)

『口伝集』卷十は、

遊女とねくろが、戦に遭ひて臨終の刻めに、「今は西方極楽の」と謠ひて往生し、高砂の四郎君、「聖徳太子」の歌を謠ひて素懷を遂げにき。

の如く、二人の遊女の往生に言及している。遊女とねくろの逸話は、『十訓抄』第十「神崎君詠歌往生極楽事」・『八九冊本』宝物集』『拾遺古徳伝絵』卷七にも見える。それらの物語るところを集約すれば、仏道のことなど全く知らないとねくろが、筑紫への旅の途次、瀬戸内海で海賊に襲撃されたが、今際に臨んで、

235 我等は何して老いぬらん、思へばいとこそあはれなれ、今は西方極楽の、弥陀の誓ひを念ずべし(雑法文歌)

を謠ひて往生を遂げたという。又、播磨国高砂の遊女四郎君も往生の際に、

422 毘沙利国の観音は、今は鳥瑟も見えじかし、入りぬらん、聖徳太子の九輪は、光も変はらで今ひをつあり(四句神歌・雑)

と謠ったというのである。

さらに、『口伝集』卷十は乙前が危篤になった際の話をも記している。駆けつけた後白河院が乙前の枕辺で結縁のために『法華経』一卷を誦み聞かせ、続けて、

32 彼法転じては、薬師の誓ひぞ頼もしき、一度御名を聞く人は、萬の病も無しとぞいふ(法文歌・仏歌)

を二三回謠ひて聞かせると、乙前はこの歌謡を経よりも賞でて、「これを承り候て、命も生き候ぬらん」と手を擦って、泣く泣く喜んだという。斯くて、歌謡の重要な担い手だった彼女たちの身は穢れていたであろうが、その心は厭離穢土・欣求浄土に向いていたと思われる。たとえ少数でもそういう遊女が存在したのである。

注1 『元亨釈書』卷二・慧解一「石淵寺勤操」には、「我等八人分法華八卷。逢熾忌各講二卷。為追薦。公等許不。七人

皆諾。便設四日二座講席。修之。名曰法華八講会。(中略)毎歲不欠。諸寺名曰石淵八講。」と記されている。その他、『発心集』卷五(四)「勤操憐榮好事」・『宝物集』卷四・『私聚百因縁集』卷九の十二「大安寺榮好事」等、多くの説話集

にも引かれている。

2 以下、本書に導かれるところ大であることを記しておきたい。なお、『今昔物語集』巻十五第三十九「源信僧都母尼往生語」の中で、僧侶にとって法華八講の講師となることがいかに荣誉であるか、述べられている。

3 『拾遺和歌集』巻二十・哀傷・1346所収、詞書は「大僧正行基よみ給ひける」。『袋草子』にも引かれている。又、『梁塵秘抄』巻二・法文歌の「法花經二十八品歌」にも同趣の歌謡六首がある。

4 龍女成仏譚に関しては、拙稿「女人と穢土浄土(上)」(国語国文論集、第四号)第一節を参照されたい。

5 成立に関しては真名序に寛弘九年(一〇一一)とある。

6 『国文学に摂取された仏教上代・中古編』第七章「源氏物語と天台仏教」第二節参照。

7 『新千載和歌集』巻九・釈教にも収載。

8 『拾遺和歌集』その他にも収載。

9 『宝物集』諸本は和泉式部詠としているが、説教資料の『和泉式部往生事』は性空上人の、『慈元抄』巻下は小野小町のそれぞれ詠歌としている。

10 日本古典文学大系『梁塵秘抄』の歌謡番号110～119のうち、110～112・114・115・118の六首が該当歌謡であり、残る四首は龍女成仏関係の歌謡である。以下、引用の歌謡番号は本書による。又、以下、必要でない限り「巻二」の記述は省略する。

11 因みに、世阿弥改作の謡曲「鵜飼」は、鵜をして殺生をなした鵜飼の因果応報譚を描いている。

12 井上光貞博士『日本浄土教成立史の研究』第三章第二節「聖・沙弥の宗教活動」、高木豊博士『平安時代法華仏教史研究』第七章第二節「持経者と聖」、笠原一男博士『女人往生思想の系譜』第二章第一節「古代仏教の世界と女性」等参照。

13 笠原博士前掲書第二章第一節参照。

14 笠原博士前掲書第二章第一節・四「巷に生きる聖法師」参照。

15 以下、日本古典文学大系『宇治拾遺物語』の説話番号による。

16 異相往生は各種往生伝類に見える他、『発心集』巻三(91)・(92)・(94)等にもある。

17 『宇治拾遺物語』が、五十余年に及ぶ穀断ちと偽って、天皇以下多数の人々の尊崇を一身に集めた聖(第百十五話)や、長く続く凶会(9)のように、「は、こすべからず」と無責任に綴った仮名暦を生女房に与えた若い僧(第七十六話)、ある

いは、男色に耽る高僧・一乗寺僧正増誉(第七十八話)などの、しかるべき仏教家にはあるまじき行為をも書き留めてい

る点に、是非とも注目しておきたい。

18 153 女の殊に持たむは、葉王品に如くは無し、如説修行年経れば、往生極樂疑はず

292 龍女が仏に成ることは、文殊の誘へこそ聞け、さぞ申す、娑羯羅王の宮を出でて、變成男子として終には成仏道

19 293 文殊の海に入りしには、婆伽羅王波を息め、龍女が南へ行きしかば、無垢や世界にも月澄めり

例えば、『八冊本ノ宝物集』には、「村上の御帯、宣耀殿の女御小一条の左大臣師尹のむすめとたはむれておはしますを、やすこの女御九条左大臣のぞきて見給ひけるに、あまりにねたくおほしければ、かはらけのわれしてうちたまふぞかし。(中略)ましてあやしのげすども、うはなりうちとかやして、髪かなぐり、取くみなどするは、ことほりにぞ侍るべし。唐こしにもかやうのこと侍りけり」(傍点引用者)とある。謡曲「葵上」にもみえる。

20 志田延義博士校注『梁塵秘抄』(日本古典文学大系) 解説・三及び『口伝集』卷十頭注(441ページ)参照。

21 関根賢司氏「青墓の宿——中世文芸の一考察」(昭和学院国語国文、第六十号)参照。

22 本節は、滝川政二郎博士の『遊女の歴史』『遊行女婦・遊女・傀儡女』両著に導かれるところ大である。

23 大江匡房『傀儡子記』は、傀儡女について「女則為愁眉啼粧折腰步齟齬咲。施朱傳粉。倡哥淫樂。以求妖嬈。父母夫智不誠。□返雖逢行人振容。不嫌二宵之佳会。(下略)」と記す。又、『平家物語』卷一「妓王」及び『徒然草』第二百二十五段は、それぞれ別個に白拍子の起源について言及している。

24 「うたげと孤心(四) 帝王と遊君」(すばる、第十五号)参照。

25 例えば、『撰集抄』卷三第三話「室ノ遊女遁世之事」に「むかし、播磨の国竹の岡といふ所に、庵むすびて行ふ尼侍り。もとは室の遊女にて侍りけるが、みめさまざま悪からざりけるにや、醍醐の中納言頭基に思はれたてまつりて、一年のほど、都になん住みわたり侍りけるが、(下略)」とある。

26 『梁塵秘抄評解』参照。

27 小西甚一博士『梁塵秘抄考』は、「巫女が多くは同時に遊女であつたことは、特にいふまでもない。巫女は、神社に属して定住するものもあつたが、その他のアルキ巫女と呼ばれ、国を遊行するものもあつたやうである。」と述べておられる(第六章「歴史的抑判」一・今様歌謡の周辺)。

28 日本古典文学大系『梁塵秘抄』364番の頭注参照。

29 『新猿楽記』は「於戲年若之間。自雖過売身。色衰之後。以何送余命哉」と記している。

30 『中世民衆の生活文化』「Ⅰ・民衆文化の振幅」・付論2「遊戯と浄土——『梁塵秘抄』を素材として——」参照。

31 例えば、『発心集』卷六<sup>(7)</sup>「室泊遊君吟」・鄭曲「結縁上人事」・『撰集抄』卷三第三「室遊女遁世之事」・同書卷九第八「江口遊女歌之事」・『拾遺古徳伝絵』卷七以下「法然上人伝」諸本などに見えている。なお、拙稿「中世における性空上人説話について」(中世文学、第十七号)第三節を参照されたい。

〔付記〕 本稿で使用した主なテキストは左の通りである。

和漢朗詠集・更級日記・今昔物語集・梁塵秘抄・建礼門院右京大夫集・宇治拾遺物語・古今著聞集は日本古典文学大系。源氏物語は日本古典全書。三宝絵は山田孝雄博士著『三宝絵略註』。△九冊本▽宝物集は古典文庫。発心集は慶安四年板本。遊女記・傀儡子記・元亨釈書は新訂増補国史大系。新猿楽記は群書類従。八代集は山岸徳平博士編『八代集全註』。私家集は私家集大成。